米欧亜回覧

第１号
編集・発行
JIKKI SALON
準備室

映像の会「岩倉使節の世界一周旅行」盛況裡に終わる！

～参会者、映像に感嘆、波紋ひろがる～

映像でみる「岩倉使節の世界一周旅行」の試写会が、九月二日午前十時半から、東京港区鳥居坂の国際文化会館レクチャーホールで、多数のゲストも含め各界にわたる約百名が参集して催された。

このスライド映像は、明治四年から六年に行なわれた岩倉使節団の六百三十二日に及ぶ「米欧回覧の旅」を紹介したもので、この旅に魅せられもう二十年近くその足跡を追って旅している泉三郎氏の制作によるものである。

泉氏はすでに「岩倉使節」に関して五冊の著作を出版し、また「岩倉ツアー」を企画して同好の人たちと五回にわたって足跡を辿る旅をしているが、この映像はその間に泉氏自身が撮影したものと収集した貴重な資料を駆使して編集制作されたもので、泉氏の長年にわたる研究の集大成ともいえるものである。

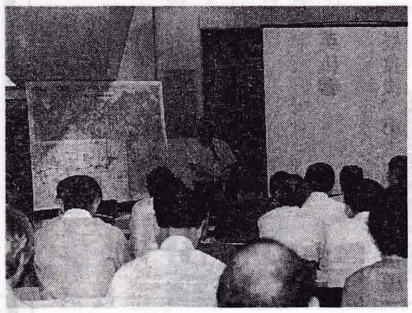
スライドは全九巻で一巻当たり約三十分であるが、それを今回は三部構成にして朝十一時より夕方五時までに一挙に上映したものである。スライドは七百コマをこえ作者自身のナレーションが入っており、参会者は六時間足らずのうちに、百二十年前の世界一周旅行を居ながらにして体験することになった。

また上映終了後にスピーチの時間が設けられたが発言者は後を断たず時間いっぱい各界からの興味あるスピーチが続いた。それはとりもなおさず、「岩倉使節の旅」のもつ大いなる意義と魅力を証明するものであり、それをビジュアルに伝えた泉氏の労作に負うところが大きい。

また、参会者が実にバラエティーに富んでおりそれぞれの立場からの発言が極めて興味深いものだったことも、この会に一段と興趣と厚みを与えたといえるだろう。

いわば「三本立ての連続上映」という前代未聞のマラソン上映にもかかわらず途中退席する人が極めて少なかったのもそのあたりに理由があるといえよう。

なお、会終了後も同会館の樺山ホールで懇親パーティが催され、去り難き人々が多数参加してグラスを傾けながら歓談の時を過ごした。



今、何故、「岩倉使節の旅」なのか？

泉　三郎

岩倉使節は今から百二十数年前、実に一年十ヶ月にわたって米欧諸国見聞の旅をしました。それは三つの意味で新しい時代を切り拓く旅を意味しています。一つには蒸気機関に象徴される産業革命の新時代に乗り出すことであり、二つには封建社会から近代社会へ転身することであり、三つには弱肉強食の帝国主義世界への参入でありました。明治の新政府は否も応もなくこの異質な西洋文明世界に対面しそれに適応せざるを得なかったのです。

そして使節はこの旅を通じて西洋文明なるものの本質を見極め、四十年もあればなんとかこれに追い付きうるという感触を得て帰ってくるのです。そしてその後のわが国は奇しくも四十年を周期として興亡を繰り返して来ました。

明治の四十年は「富国強兵」に邁進し日露戦争に勝利して一等国の仲間入りをします。その後の四十年は初心を忘れて奢り高ぶり自ら帝国主義の野心にとらわれて自滅します。そして戦後四十年、今度は廃墟の中からひたすら「富国」を目指し、世界に冠たる経済大国を築くのです。

そして、今、われわれは「物豊かにして心貧しく、諸事便利にして品性劣等」の現実に直面し、あらためて「文明開化」とは何か、「近代化」とは何であったのかを問いなおさねばならぬ事態にたち至っているのです。つまりわが国はいま戦後五十年を、維新百二十年を振り返ってみる必要にかられているのです。そしてそのための格好の素材が「岩倉使節の旅」であることに気付くのです。

今、何故、「岩倉使節の旅」なのか、それはこの映像をご覧になればご理解いただけると思います。これをイントロダクションとして、「岩倉使節の旅」とその記録である「米欧回覧実記」への関心が高まる事を祈ってやみません。

多彩なスピーチ　関心の広がりを証明！

今回の催しは「映像の一方通行」に終わらず、各界の参会者から多彩なスピーチが寄せられたことで、「岩倉使節の旅」や「米欧回覧実記」が極めて広範な関心を呼び起こし、また今日的な意味をもつ対象であることを証明したかたちになった。

以下は浅沼晴男氏（文化総合研究所）の軽快な司会の下に繰り広げられた各氏の発言の模様である。

アメリカ編

まず第一部「アメリカ編」の上映が終了した時点で三人の方のコメントがあった。

市岡揚一郎氏（日本経済新聞論説主幹）はワシントン駐在中に「実記」をガイドに岩倉使節の足跡を辿り「アメリカ・百年の旅」（サイマル出版）を出版されているが、その体験から「よくぞこれだけの写真や資料を集められた。なにか使節団の意気込みとか感動とか失望とか落胆といったものがじかに伝わってくるような思いがした。胸がちょっと熱くなるような瞬間もありました」と感想をもらし、「岩倉使節の旅は百二十年を経てなお多くの示唆を与えてくれる。この時代のことはもう一度掘り起こしてみたい」と述べた。

また、同時期アメリカに留学していた岩男三郎の子孫にあたる古谷九八郎氏（ＶＩＳＡインターナショナル日本総支配人）は、使節団が大変苦労して旅して、政治、経済、金融、宗教などいろいろの分野で価値ある情報をもたらしたことを指摘し、「この使節団が現代のわれわれに問いかけている意味は非常に大きい」と強調した。

文部省派遣の随員近藤昌綱氏の子孫にあたる近藤義彦氏（三井物産）は、海外経験が豊富なだけに映像をみて感慨もひとしおで、子孫の者がぜんぜん不勉強なのにこうして熱心に研究してくださる方がいらっしゃることに心から敬意を表したいと述べた。

英仏編

昼食後、第二部の「英仏編」が上映され、終了後お二人の方からコメントがあった。お一人は日本地理学会会長でもある竹内啓一氏（一橋大学名誉教授）で、マレーやベデカのガイドブックを読んでいるうちに「実記」に興味をもったこと、読むうちにこれが幕末維新期の日本人の西洋見聞録の中でも突出した記録であることを発見したこと、そして本日の映像については「これまでの〝実記〟研究の成果…海外の研究も含めて…をよくこなしてまとめ上げられたこと、その年月、努力、お金…これは本当に驚嘆すべきことだ」と述べ、さらには「ただ単に古いものを集めたというだけでなく、そこに泉さんのはっきりした目というか、歴史観、世界観が出ている。そういう意味で立派な作品でありお仕事だと思う。もっともっと沢山の人にみられるように願っています」と惜しみない賛辞を贈った。

もうお一人は大久保利通の直系の子孫である大久保利泰氏で、「私は専門的、学問的なお話はできませんが……」と、大変ユーモラスにご子孫ならではのお話を披露された。「利通は当時の日本人としては背が高く百七十七センチくらいあった。それで日本の家ではよく鴨居なんかに頭をぶつけていたのが、向こうへいったらそんな心配がないし目線の位置も具合がよかったらしい。どうやらヨーロッパの生活があっていたようで、帰国してからも和室より洋間を好み火鉢よりストーブのある生活をしていました。食事などもパン、ミルク、ミルクセーキを好み、お蔭で私の家では百年前から朝はずうーとパン食でやっております…」

ヨーロッパ編

当日はよく晴れた日で、コーヒーブレイクでは多くの人がベランダに出て縁の風に触れながら一息いれた。

第三部は「欧州編」で帰国して大逆転劇にいたる「最終編」である。そしていよいよ実質四時間半にわたった大団円の終了となった時、会場からは期せずして大きな拍手が起こった。

ここでまた三人の方からコメントがあった。お一人は中川努氏（大阪大学名誉教授）で、泉氏コーディネイトの「岩倉ツアー」に五回とも参加しておられるだけに「ひとしお感慨にむせぶものあり」と述べられ、英国での使節団について「維新になったばかりの日本の選良たちの意識が英国のアリストクラットつまり階級意識にぴったりあったのではないか」と英文学の専門家らしい感想を述べられた。

続いて「米欧回覧実記の学際的研究」の編著者でもある高田誠二氏（北海道大学名誉教授）がたった。「今日は居ながらにして世界一周をさせていただき楽しい一日でした。また実にさまざまの分野の人がお集まりでありそういう方々と一緒に勉強できるのはそれ自体大変素晴しいことです」

と述べ、専門の科学技術史の分野でも最近は外国人の中にこのむずかしい「米欧回覧実記」を読むひとが出て来たことを紹介された。

コメントの最後には岩倉具視を「ジジイのジジイ」とおっしゃる岩倉具忠氏（京都大学教授）がたった。昨年までローマの日本文化館の館長をしておられた氏は、イタリア人に日本を知らせる必要があり、それには岩倉使節団を紹介するのがいいと展覧会を催されたことを披露され、これからの国際交流の在り方として従来は異質な点を強調しがちだったがこれからはむしろ共通点を押し出していく方が大事ではないかと指摘された。

世界一周を終えて

それからフリースピーチに入り、いろいろの分野の方から貴重なお話をうかがった。ごく簡略に紹介させていただくと……。

池田巌氏（漆工芸家）は「余り長時間なので途中でズラかろうかと思っていたのですが、結局最後までみてしまい、いまはもっと聞きたい気持ちです」と率直な感想を述べた。

コラムニストでもある井尻千男氏（日本経済新聞編集委員）は、都市論の視点から「明治の先人たちは都市をどう考えていたか。これだけの見聞をしていることからして相当の考えを持っていたと察っせられる。が、戦後の政治家はいったい何を考えてきたのか」と厳しい口調で述べ、「開く」ばかりでなく「閉じる」ことも考えなくてはいけないと鋭く現代の問題点を衝かれた。

次いで岩倉翔子氏（就実女子大学教授）がたち、ご主人（具忠氏）と岩倉使節のイタリアでの行動を調べたことを具体的に報告された。

ダイヤモンド社で泉三郎氏の本を編集担当した加登屋陽一氏（清流出版社長）は、一年前のトライヤルに比べて映像が格段に素晴しくなったことに驚きを表わし、あらためて出版への意欲を表明した。

鹿児島からやってきた新原剛操氏（ＭＲＡＰ社長）は、欧米に行かなかった西郷さんの気持ちになって泉氏の「岩倉ツアー」（全五回）に参加した経緯を述べ、実際に岩倉の足跡を辿って旅してみるとまことに「百聞は一見に如かず」で、言葉でいいつくせぬ感動があり、本では知ることのできないものを学ぶことができたと実感を披瀝した。

加納孝代氏（青山学院女子短大教授）は「実記」をテキストに使っているが、時間の都合で「米英編」しか読んでない現状を悔い、「やはり全体を見なくてはいけない。このような映像を是非学生に見せたい」と強い願望をこめて語った。

また昨年までバリバリの商社マンだった河村幹夫氏（多摩大学教授）は、加米英滞在の体験から帝国主義時代の世界情勢を分析して「日本というのは当時ほんとうに上手に植民地化の嵐を切り抜けてきたものだと思う。それにはこの時期岩倉使節のようなものがあって欧米をしっかり見聞してきたことに大きな意味があったと思う」と述べた。

泉氏の地元八王子のロータリークラブ仲間である杉山友一氏（山栄興産社長）は、「これだけの労作ですからこのまま学者の先生や特別関心のある方だけのものにしておくのはもったいない。国のためにもよろしくない。もっともっと一般の人が気軽にみられるような工夫をしてもらえないか」といって賛同の拍手を浴びた。

また、林茂雄氏（東京新聞編集委員）は久米の「米欧回覧実記」を極めて良質なルポルタージュだと賞賛し、泉氏の新しい〝米欧回覧実記〟もまた極めて良質なルポルタージュだと高い評価を与えた。

山田哲司氏（京王プラザホテル監査役）は、「この映像で一八七一～三年の世界を一覧できるのは素晴しい。この時点をスタート時として現代にいたるまでの各国の歴史をあらためて考えなおすヒントがたくさんあった。また、ホテルの今昔をみられる点でも大変勉強になった」と述べた。

村上明氏（帝国通信工業社長）は空洞化に悩みながら海外戦略を展開している第一線の経営者として「国際交流の在り方について大変勉強になる」と語った。

大阪からやってきた多屋貞男氏（伸生スクラップ社長）は「実記」を文語調だからかえって読み易かったといい、「百二十年前に現在のことを見透している、実に観測眼が鋭い、今にあてはめてもえろう狂うてない、一種予言書みたいな感じで読みました」と独特のやわらかな関西弁で感想を述べた。

❀　❀　❀

こうして予定の時間を大幅にオーバーしてスピーチは終わった。

映像「岩倉使節の世界一周旅行」はこのように参会者にいろいろの刺激を与え、さまざまな感慨や発言をひきだしたといえるだろう。これからもこの映像をきっかけに、この「輪」がさらに大きく深く広がっていくことを期待したい。（スピーチは発言順、文責…小田八郎）

アンケート抄録

＊「米欧回覧実記」

・百二十年、これに続く紀行がみられないことに近代日本史の問題を感じます。

・長崎の通詞本木昌造の創った日本で最初の活字によって「実記」が印刷されていることに、印刷を業としている者として特別の意義を感じています。

・主婦のグループで、ドイツ公使のみた日本（ブラント）を読んでいますが、次は「米欧回覧実記」を読むことになっています。

＊「岩倉使節団」

・中、高、大学、卒業後も岩倉使節団について殆ど聞くことが少なかった…これは日本社会の歴史認識度の欠落と思える。明治維新までふりかえると民族の自信が甦り昭和の愚かさがわかる。

・面白かった。日本の歴史教育に取り入れるべきだ。

・世界（先進国）の政治、経済、社会の情報を短期間に収集、分析した唯一のチームであったことを、現代の情報革命に合わせて強調すべきと思われますが…。

・使節団がどんな目と耳で旅をしたか興味があったが、異国の自然美への感動、産業革命を目前に見ての技術への驚きなど、とてもバランスのとれた視座を備えていたことを学ぶことができた。

＊「映　像」

・全体として強い感銘をうける力作である。長いけれど冗長ではない。この版はこれで意味がある。

・やや冗長、いかにも長い。

・岩倉使節についてあまり知らない人に興味を起こさせるには、もう少しハイライト中心にまとめる必要がある。大学のゼミなどでは今回の方法がよいと思う。

・「実記」のビジュアル版として意義大。

・大いなる文化作品である。広く活用されることを期待します。

・ダイジェスト版と二本立てにするのがよい。

・是非NHKでテレビ化するよう努力してほしい。

（以上はアンケートからの抜粋です）

岩倉使節の世界一周大行進

（映像スライドのご案内）

本来は連続講座の補助教材として作成されたものですが、再編集により独立して映写することも可能になりました。

各巻はスライドコマ数75〜80枚で、ナレーションはテープに録音されており、オートスライドで約30分で映写できます。

第一部　＜米国編＞
- 1巻　横浜出帆からサンフランシスコまで
- 2巻　大陸横断・汽車の旅
- 3巻　ワシントン滞在と東部回覧

第二部　＜英仏編＞
- 4巻　全盛期の大英帝国を往く
- 5巻　英国社会の光と影
- 6巻　麗都パリは天宮の如し

第三部　＜欧州編＞
- 7巻　二つの小国と新興ドイツ
- 8巻　大国ロシアとバルト諸国
- 9巻　アルプスの南へ、そして帰国へ

連絡先　JIKKI SALON「米欧回覧の会」
・東京都中央区銀座6−4−8 飯島ビル 2号館 7階
ギャラリー田川　TEL03-3574-6633
・東京都八王子市元横山町1−14−16
イズミ・オフィス　TEL・FAX 0426-46-4513

＊編集後記

今回の「映像の会」については、長時間にわたり熱心にご覧いただきまことに有難うございました。またゲストの方々をはじめ各界の方から貴重なコメントや励ましのお言葉を拝聴し大変嬉しく存じております。みなさまのスピーチが本日の会を一段と盛り上げて下さったことに深く感謝しております。またアンケートにいろいろお応えいただき有難うございました。今後の良き指針にさせていただくつもりであります。

「岩倉使節の旅」と「米欧回覧実記」は、二十一世紀を目前にした新しい時代のパラダイムを考えるうえで、またとない素材だと思います。どうかこの映像をいろいろな形でご利用下さって、「岩倉使節」や「実記」への関心や研究の輪が全国的に広がっていくことを願っております。

小さなニュースですが、第一回の「映像の会」を記念して編集いたしました。

（発起人代表）山本季司
浅沼晴男・田川信人